

景観形成の考え方

横浜スタジアム増築・改修計画

はじめに

横浜スタジアム増築・改修計画 事業の目的

横浜スタジアムは、ハマのシンボルとして、横浜公園野球場、ゲーリック球場、平和球場と名称を変え、多くの横浜市民や全国の野球ファンの皆様に愛され、そして、支えられ、変貌を遂げてきました。

昭和53年のオープンから38年が経過し、この間、時代の変化やお客様のニーズに合わせ、幾度となく改修等を繰返し今日に至っていますが、施設の老朽化、競技環境と観客サービスレベルの低下が課題となっています。

横浜スタジアムが、ハマのシンボルとして多くの市民に長く愛され続け、関内・関外地区のにぎわいに寄与し、併せて、東京オリンピック競技大会の野球・ソフトボールのメインスタジアムとして、大会を成功に導く場となるよう改修計画事業を行うものであります。

景観形成を図るにあたって

本計画は、横浜公園が敷地となっています。公園内にはネットワーク街路が通過しており、都市プロムナードに面した敷地となっています。また、日本大通りから目に留まる場所となっています。本施設は、すでにハマのシンボルとなる都市景観を形成しており、その景観の持つ魅力を損なうことないよう配慮した計画であるとともに、公園内により多くのにぎわいを生み出す工夫を盛り込んだ計画としています。

本資料の位置づけ

第1回都市美対策委員会(2017.03.27)の協議内容にもとづき、検討・対応した結果を、追加資料として取りまとめております。

目次

計画概要	01
回遊デッキの形状と活用方法について①	02
回遊デッキの形状と活用方法について②	03
回遊デッキの形状と活用方法について③	04
構造のプロセスについて①	05
構造のプロセスについて②	06
構造のプロセスについて③	07
色彩計画・(屋外広告物)について	08
緑化計画について	09
夜間景観について	10
立面図	11



■ 計画概要

地名地番	: 横浜市中区横浜公園
用途地域	: 商業地域
防火指定	: 防火地域
高度地区	: 第7種高度地区
その他の区域指定	: 特別用途地区(横浜都心機能誘導地区) 駐車場整備地区、景観計画、都市景観協議地区
敷地面積	: 63,787.16㎡
建蔽率	: 80%
容積率	: 700%

■ 建築概要

主要用途	: 観覧場(野球場)
延床面積	: 約46,000㎡
建築面積	: 約23,100㎡
建蔽率	: 約38%
階数	: 地上4階
建築物高さ	: 最高高さ 31m
増席数	: 約6,000席

回遊デッキの形状と活用方法について①

公園の立体化による 新たな利用方法の提案



1 回遊デッキ設置による
新たな視点場の創出

変更点：ガラス(フラットバー)手摺による視先の抜け確保。



2 公園利用者を迎え入れる
ELV・階段・スロープの設置

変更点：HC用のELV設備の充実。



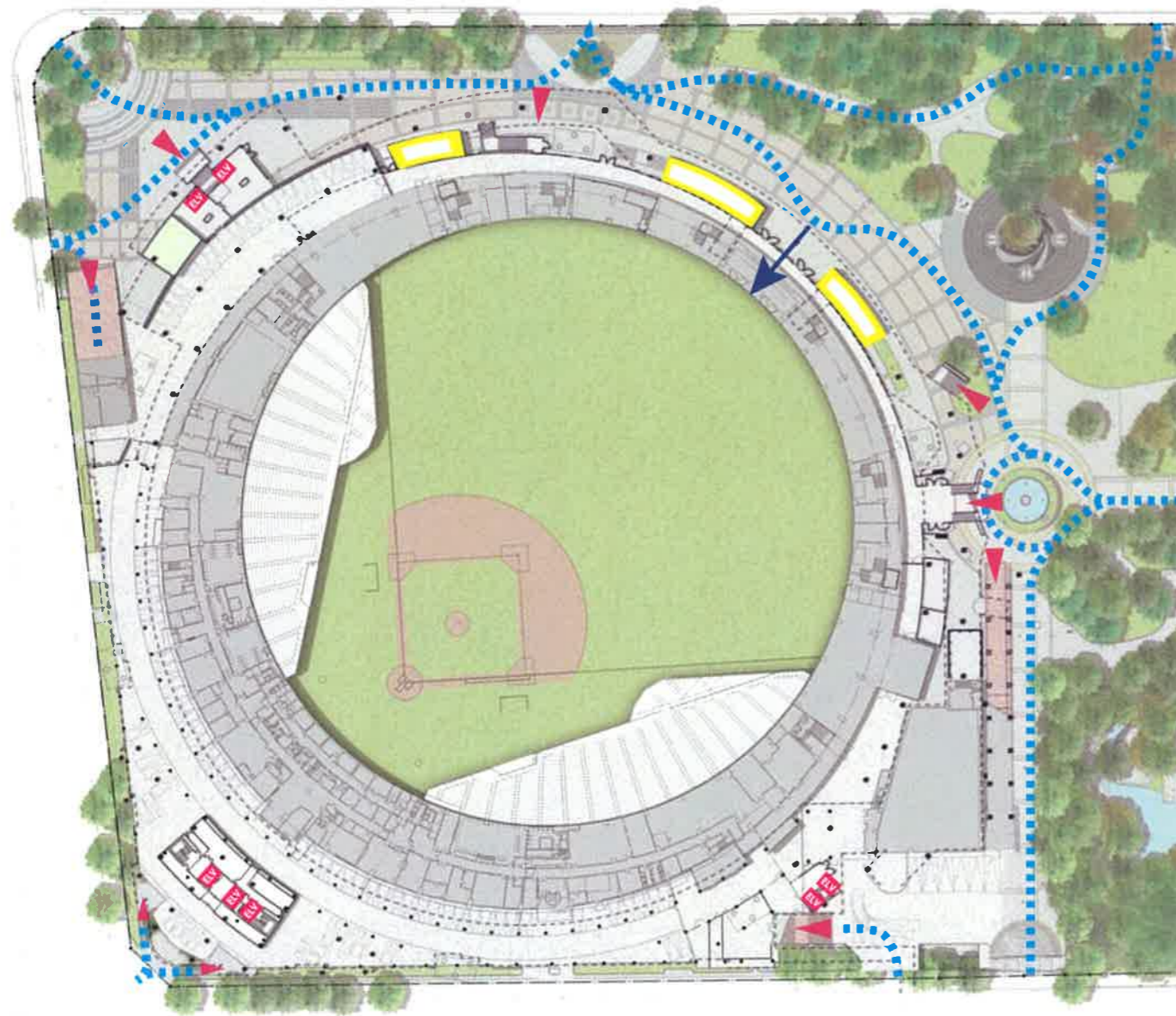
3 回遊性のある動線計画
スポーツを核とした街づくり

変更点：回遊デッキへのサイン提案。

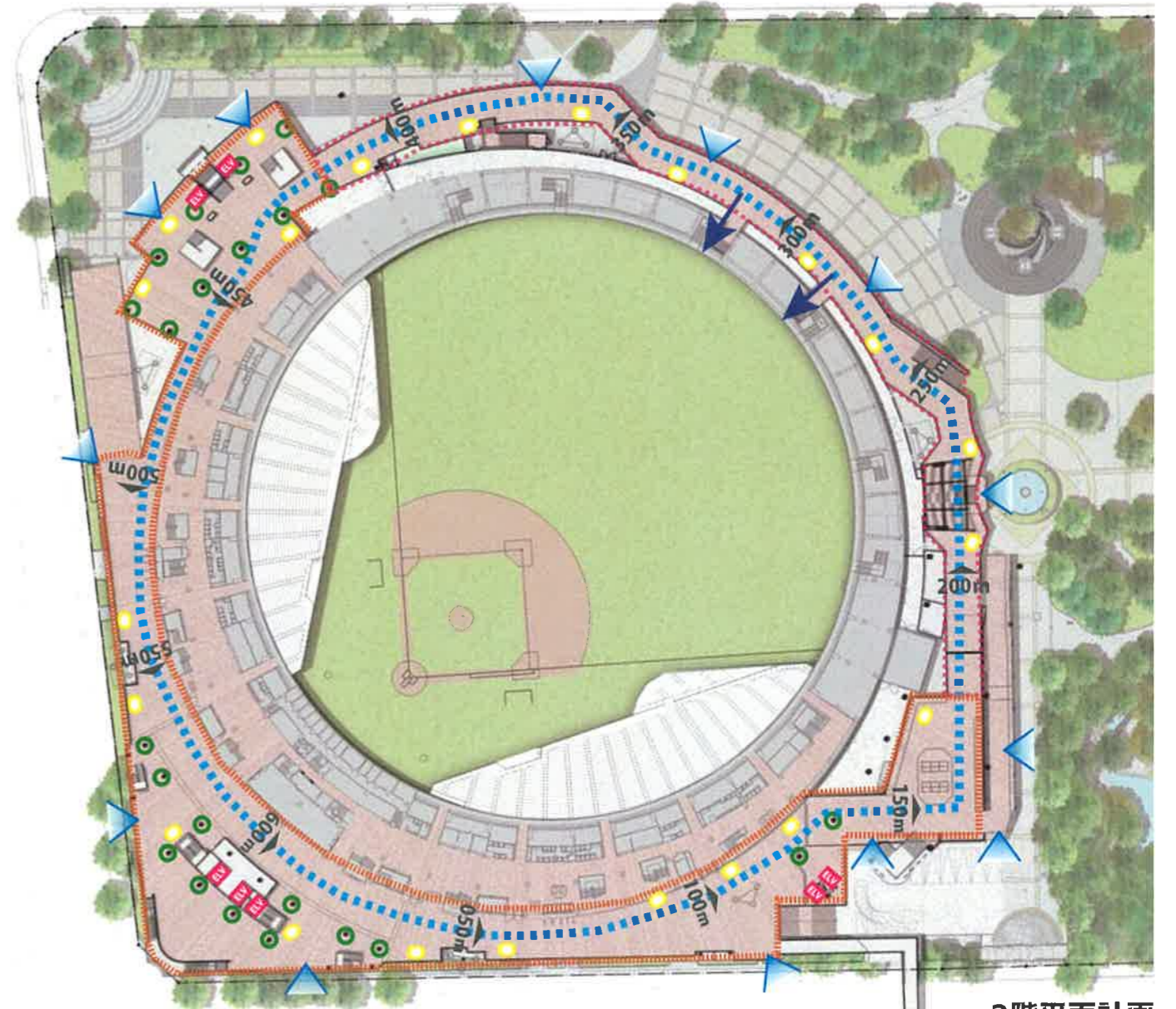


4 ドリームゲートの強化

変更点：ゲートの床拡張による、公園との一体感強化。



1階平面図
S=1:1400



2階平面計画
S=1:1400



5 店舗(常設・仮設)設置による
施設と公園間の賑い創出

変更点：設備インフラを整備。ワゴン店舗等の設置検討。



6 開放的な軒下空間
イベントスペースの市民利用

変更点：軒下空間の市民利用のイメージについて。



7 横浜公園に関する展示スペース設置
人工台地の賑いの創出

変更点：デジタルサイネージ・展示パネル等を分散配置。



8 回遊デッキを利用した
立体的なイベント企画

変更点：デッキの断面図形状変更、店舗開口の検討。

回遊デッキの形状と活用方法について②

公園の立体化による 新たな活用方法の提案

1:回遊デッキによる新たな視点場の創出



ガラス(フラットバー)手摺に変更した回遊デッキや、高層部への屋上テラス席設置により、公園や横浜市内を一望できる視点場を創出し、これまでにない新たな市民開放を実現します。

2:公園利用者を迎え入れるELV・階段・ｽｰﾌﾟの設置



立体的な公園利用を実現するため、既存の公園にある要素(スクラッチタイル・噴水等)と調和した、階段・スロープを設置します。また、HC用のエレベーターを各所に整備します。

3:回遊性のある動線計画(スポーツを核とした街づくり)



回遊デッキにより公園内を回遊しやすくすることで、散策やジョギング等、公園活用の幅を広げ、スポーツを核としたまちづくりに貢献します。また、デッキ上へ公園利用者が日常的に楽しめるサイン計画を検討します。

4:ドリームゲートの強化(公園との一体感強化)



公園側からスタジアム内が見えるゲートを増設することで、球場の開放感と熱気を公園内に日常的に波及させ、賑わいをもたらします。また、2Fドリームゲートの床面積を拡張し、公園との更なる一体感強化を図ります。

5:公園側への店舗設置による賑わい創出



回遊デッキに沿って公園側に店舗を設け、公園利用者の憩いの場を提供すると共に、利便性を向上させます。また、新たにインフラの整備を行うことで、回遊デッキまわりに移動販売店舗等を設け、人の賑わいをつくり出します。

6:開放的な軒下空間の確保



公園利用者が使用可能な開放的な軒下空間を創出することで、各種イベント(パター・お祭り等)を天候等に左右されずに開催することができます。また、日頃から人目に付き易い場とし、加えて定期的な警備により、良好な軒下空間を維持します。

7:展示スペース等による賑わいの創出



回遊デッキ・人工地盤に、公園・野球に関する歴史資料や最新情報を発信する、展示パネル・サイン・デジタルサイネージ等を設け、人の賑わいを日常的に生み出します。

8:回遊デッキを利用した立体的なイベント企画



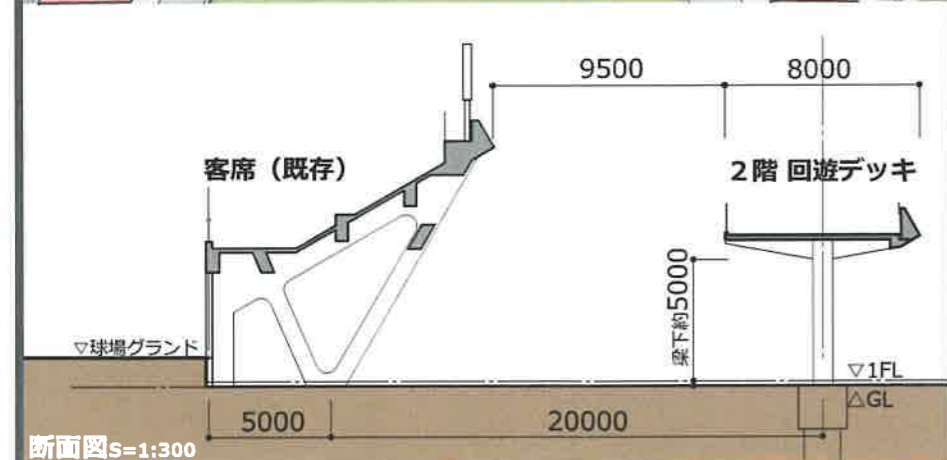
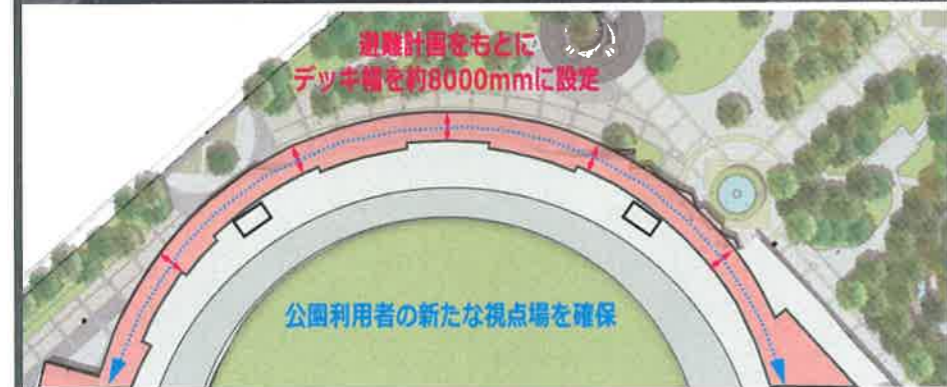
これまでの公園のイベントを地上レベルだけでなく、回遊デッキ・人工地盤の上下を利用した立体的な企画(例:緑化フェア等)とすることが可能となります。軒下空間の天高確保・デッキのヴォリューム軽減により良好な軒下空間とします。

回遊デッキの形状と活用方法について③

A 形態・機能の推移

回遊デッキ

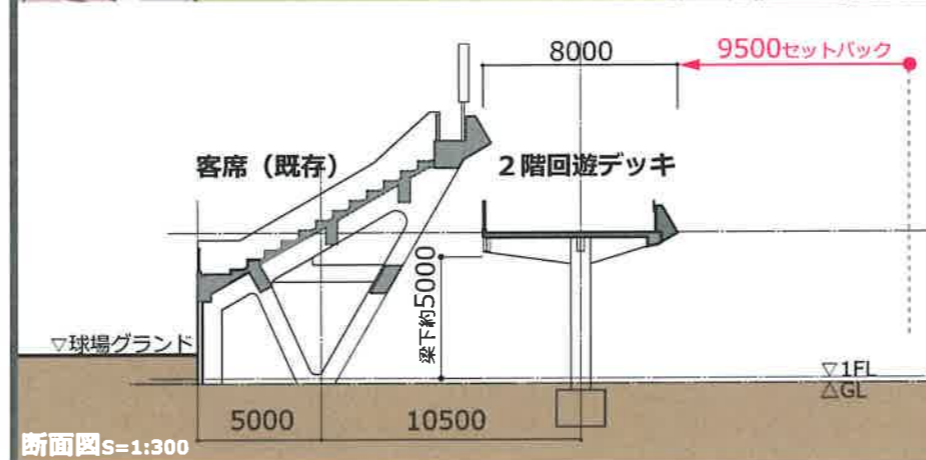
Phase 01 球場の形状に合わせたデッキの増設



形態・機能
・球場の円形に合わせた同心円状のデッキ設置
(公園利用者の新たな視点場となると同時に、施設利用者の避難デッキとしても活用)
・躯体と一体とした手摺とするべく、パネルにより構築
・構成要素の少ないシンプルな形状

圧迫感軽減・公園利用者への配慮が不十分

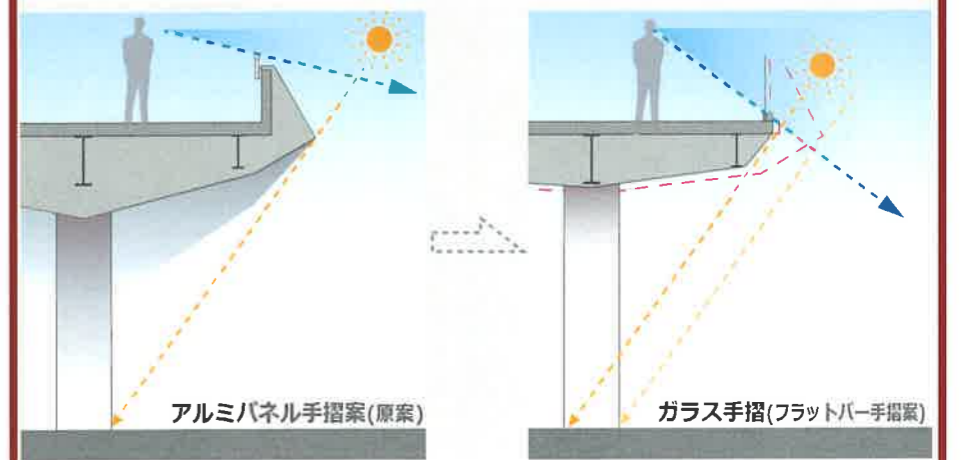
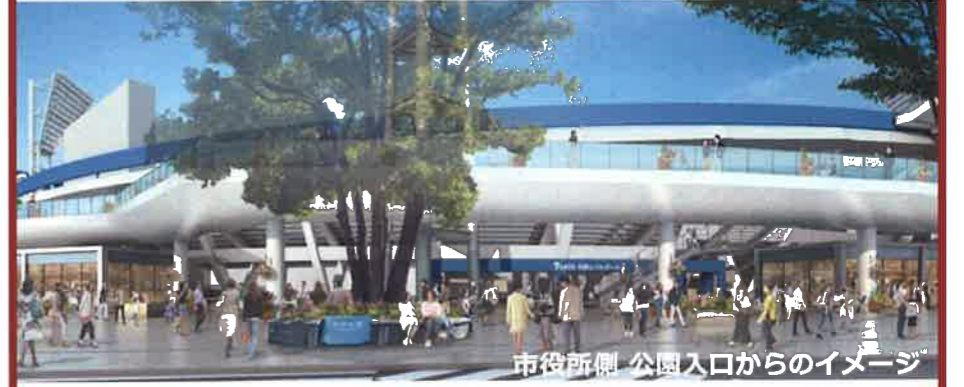
Phase 02 公園側へ配慮した平面形状と、デッキ下の明るさ・賑いを確保する断面構成



形態・機能
・公園側から極力セットバックし、公園利用者の動線を確保
・階段追加・軒下通路の検討により、回遊デッキ上下に公園利用者の動線を確保
・デッキ軒下の設備配管・構造体を隠した一体的でシンプルな構成
・軒天高さを約5m確保し、かつ既存建屋からセットバックすることで明るさを確保
・施工可能範囲内で公園側からセットバック
・デッキ下への店舗設置により、賑いを創出

圧迫感軽減、公園利用者への動線配慮

Phase 03 圧迫感の軽減、視線の抜け確保



形態・機能
・ガラス(フラットバー)手摺設置により、デッキのヴォリューム感を大幅に軽減
・手摺パネルの立ち上がり中止により、回遊デッキ上下からの視線の抜けを確保
・ヴォリュームの軽減に加えて、回遊デッキの軒天を斜めにし、明るい面をつくることで、良好な軒下空間を創出する
・店舗まわりに仮設の椅子・テーブル等を配置し、公園利用者の憩いの場をつくる

圧迫感の更なる軽減と抜け感確保

A 形態・機能の推移

右翼スタンド（日本庭園側）

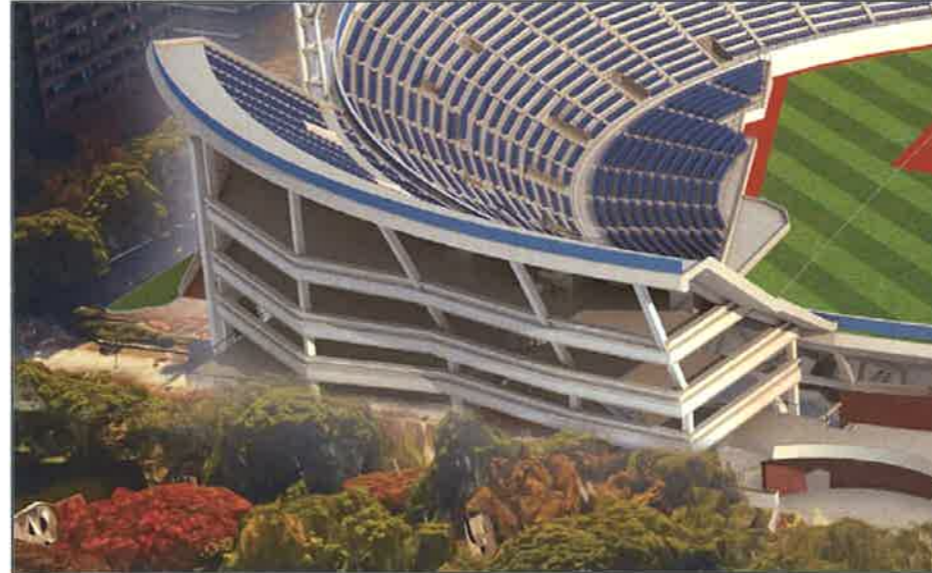
Phase 01 一般的な仕様・計算による増設



形態・機能
・屋内練習場を避けて柱を設置
・一部スパンにブレースあり

圧迫感軽減への配慮が不十分

Phase 02 日本庭園への配慮・圧迫感の軽減



形態・機能
・既存の形態に合わせて、スタンド頂部の柱を斜めとする
・躯体平面図形を一部セットバック

部材減・柱のセットバックによる圧迫感の軽減

Phase 03 既存とのデザインの調和・更なる圧迫感の軽減



形態・機能
・既存の屋内練習場に配慮しつつも柱の数を最小限とし、圧迫感を低減
・既存スタジアムの円形に配慮した同心円状の架構
・躯体平面図形を一部セットバック

圧迫感の更なる軽減

日本庭園側からの構造体の見え方

Phase 01 既存形態に沿った構造体の計画(柱位置のセットバック)



形態・機能
・日本庭園側にある柱、ブレースを出来る限り、中止・移動する。
・日本庭園を眺めることが出来る新たな視点場を設け、人の賑わいを創出する。

部材減・柱のセットバックによる圧迫感の軽減

Phase 02 柱形状のスリム化



形態・機能
・地上レベルの柱のサイズを1000角から800角へスリム化する。
・最も目立つ斜め柱のサイズを800角から500角へスリム化する。

斜め柱の存在感を軽減し、上部への抜け感向上

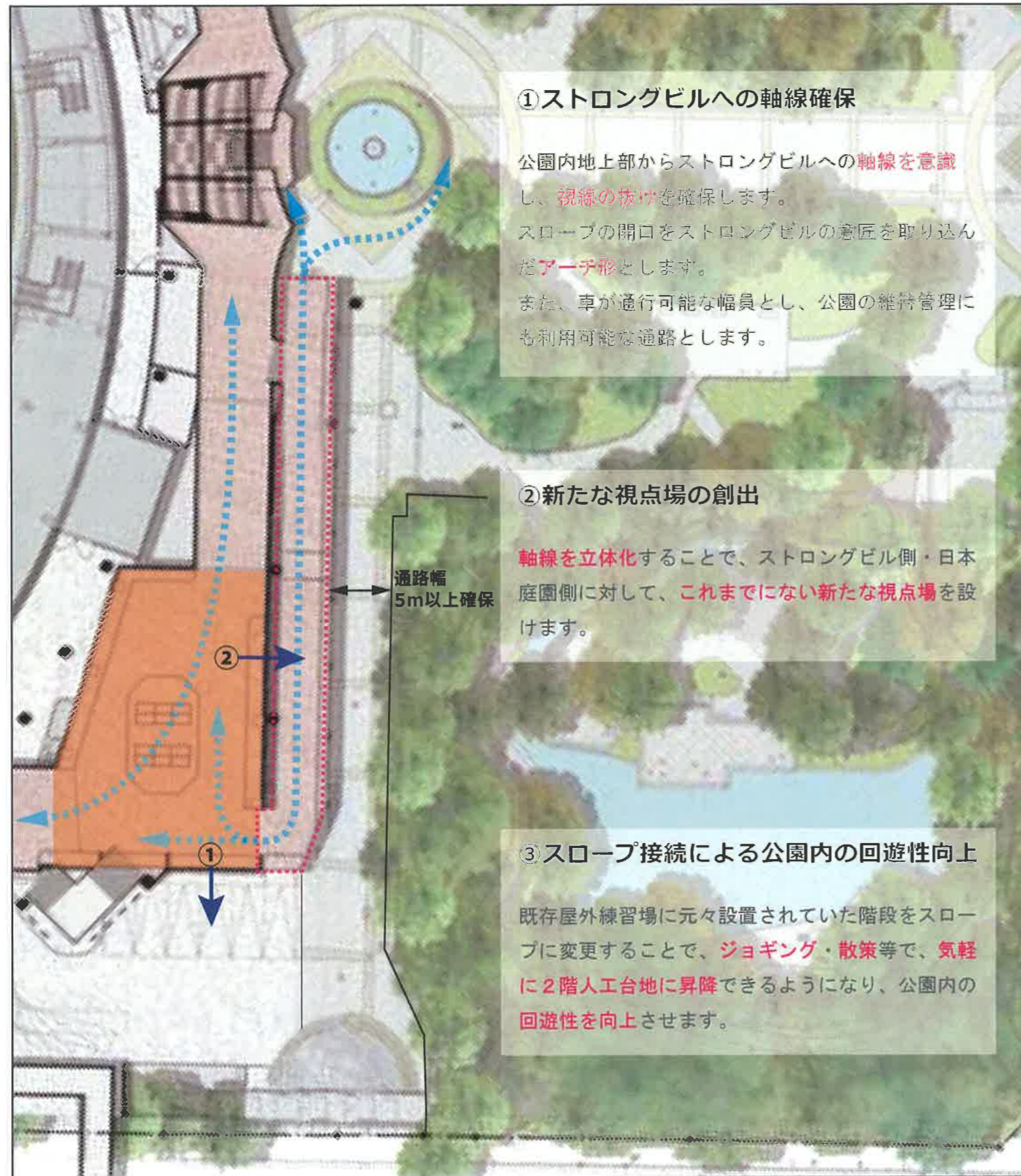
Phase 03 梁形状のスリム化



形態・機能
・日本庭園側に面する梁、手摺形状をパネル貼から、抜け感のあるフラットバー手摺等とする。
・スロープに設置される開口をストロングビルの意匠を取り込んだアーチ形とする。

圧迫感の更なる軽減

構造のプロセスについて②



1階平面図

凡例

- ... 新設スロープ
- ... 回遊動線
- ... 既存建屋
- ←... 視点場

ストロングビル側への軸線の確保



ストロングビル・日本庭園に対する新たな視点場の創出

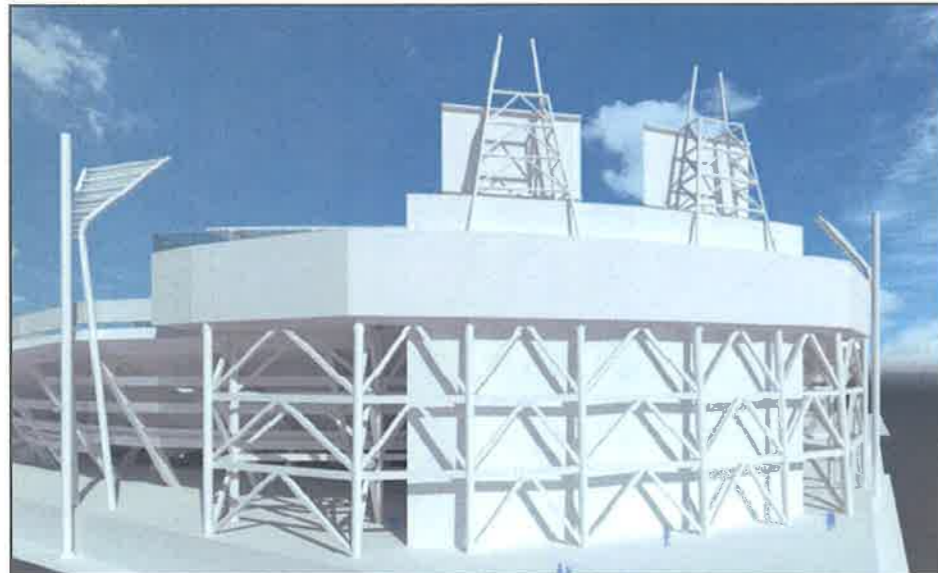


構造のプロセスについて③

A 形態・機能の推移

バックネット裏

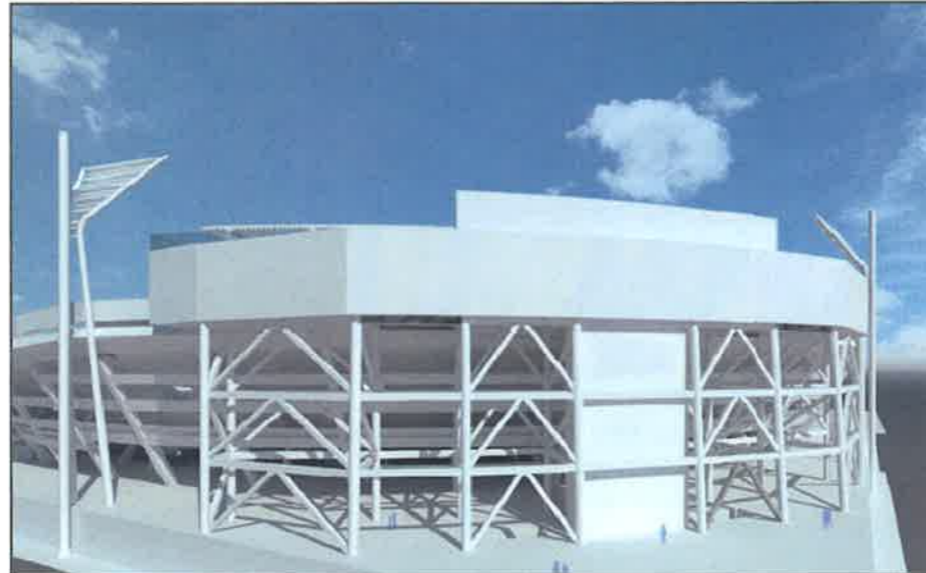
Phase 01 一般的な仕様・計算による増設



- 形態・機能
- ・フラッグ有(工作物)
 - ・各スパンブレースあり
 - ・階段を内部階段としていた

圧迫感軽減への配慮が不十分

Phase 02 頂部の街並みとの調和、圧迫感の軽減



- 形態・機能
- ・外部からの景観に配慮してフラッグ中止
 - ・検討によるブレースの一部中止や階段の外部階段化によるボリューム感の軽減

部材減・屋外化による圧迫感の軽減

Phase 03 半屋外広場の創出、更なる圧迫感の軽減



- 形態・機能
- ・検討による中間2か所のスパン拡大と一部梁・ブレース中止による既存への抜け感確保
 - ・エレベーターシャフトの間を空けてボリューム感を軽減

圧迫感の更なる軽減と抜け感確保

個室観覧席棟 イメージ



構造体による威圧感を軽減し、視線の抜けを確保することで、公園利用者の憩いの場となる半屋外広場をつくり、人工台地の上を有効活用します。

半屋外広場のイメージ① 日常利用



新横浜公園・野球に関する歴史資料や最新情報を発信する、展示パネル・サイン・デジタルサイネージ等を設け、人の賑わいを日常的に生み出します。

半屋外広場のイメージ② イベント時



開放的な軒下空間を創出することで、各種イベント(バザー・お祭り等)を天候等に左右されずに開催することができます。

色彩計画

ミナト横浜のシンボル・横浜公園の歴史と調和する色彩計画

既存建屋 周辺の色彩計画における三つの視点






①横浜のシンボル群との調和
ベイエリアに立地する港町横浜のシンボル(日本丸、マリンタワー・既存スタジアム等)との調和を図ります。



②スタジアム内と公園の連続
既存スタジアム内の基調色である青色が、公園とスタジアムが連続する箇所に使用され、賑わいを生み出すアクセントとなっています。



③横浜公園の歴史との調和
横浜公園と日本大通りの歴史的關係を物語るスクラッチタイル等を用いることで、公園の歴史への敬意を示します。

<p>【白】</p> <p>シンボルの基調色を継承</p>  <p>港町横浜のシンボルと調和する、既存建屋の白の基調色を継承し、街や既存建屋との統一感のある全体像とします。</p>	<p>【青】</p> <p>賑いを生み出すアクセント</p>  <p>既存建屋と同様に、スタジアム内の開放感と熱気が公園と連続し、賑いをもたらす場に、青のアクセントを使用します。</p>	<p>【タイル】</p> <p>横浜公園との一体的な仕様</p>  <p>公園来訪者が、気軽に施設(デッキ等)を利用できるように、公園と建物の接続部分にスクラッチタイル等を使用し、一体感を演出します。</p>
---	--	---

店舗サイン

統一感のある店舗サインの設置

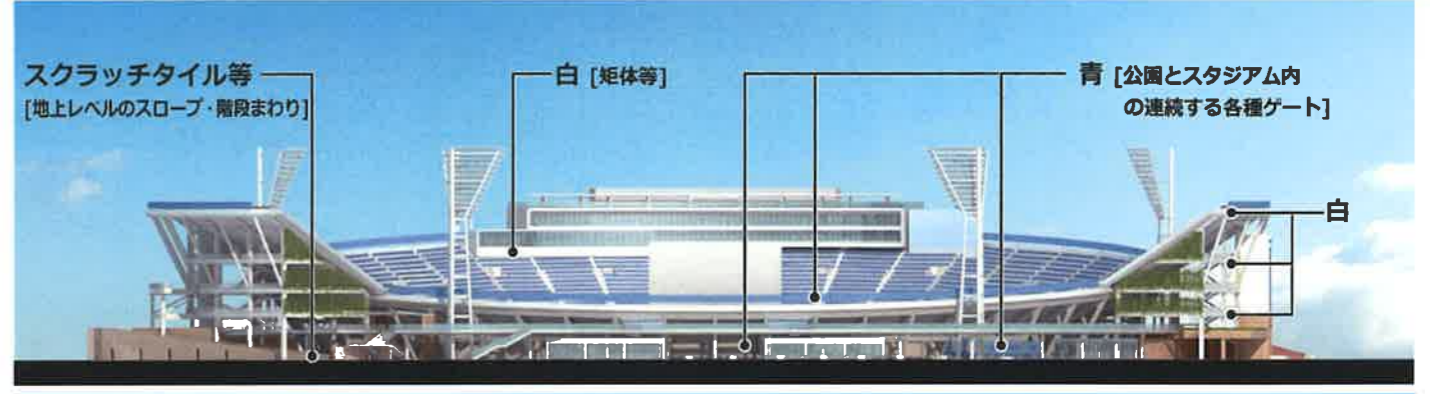
色彩計画に則って、増築部分のサイン範囲を限定し(店舗正面の上部に納め)、統一感のある景観となるよう努めます。

屋外広告物の考え方

色彩計画に合わせて統一感を保つべく、継続して協議を行う。



色彩のレイアウトについて



日本大通り側 噴水前の階段



階段のササラ・床・蹴上面の色を青のアクセントカラーとし、日本大通り・噴水に対してシンボリックな階段としている。



公園とスタジアム内が連続する場ではないため、階段のアクセントカラー(青色)中止とし、基調色の白を使用することで、街や公園の景観に溶け込む計画とする。

左翼スタンド 関内側ゲート



人通りが最も多い関内駅側の公園入口に対して、ゲートの色を青のアクセントカラーとし、誘目性を強めた計画としている。



公園とスタジアム内が連続するゲートの内側に青のアクセントカラーを表現し、ファサードには基調色・スクラッチタイル等を用いることで、周囲に調和した計画とする。

バックネット裏



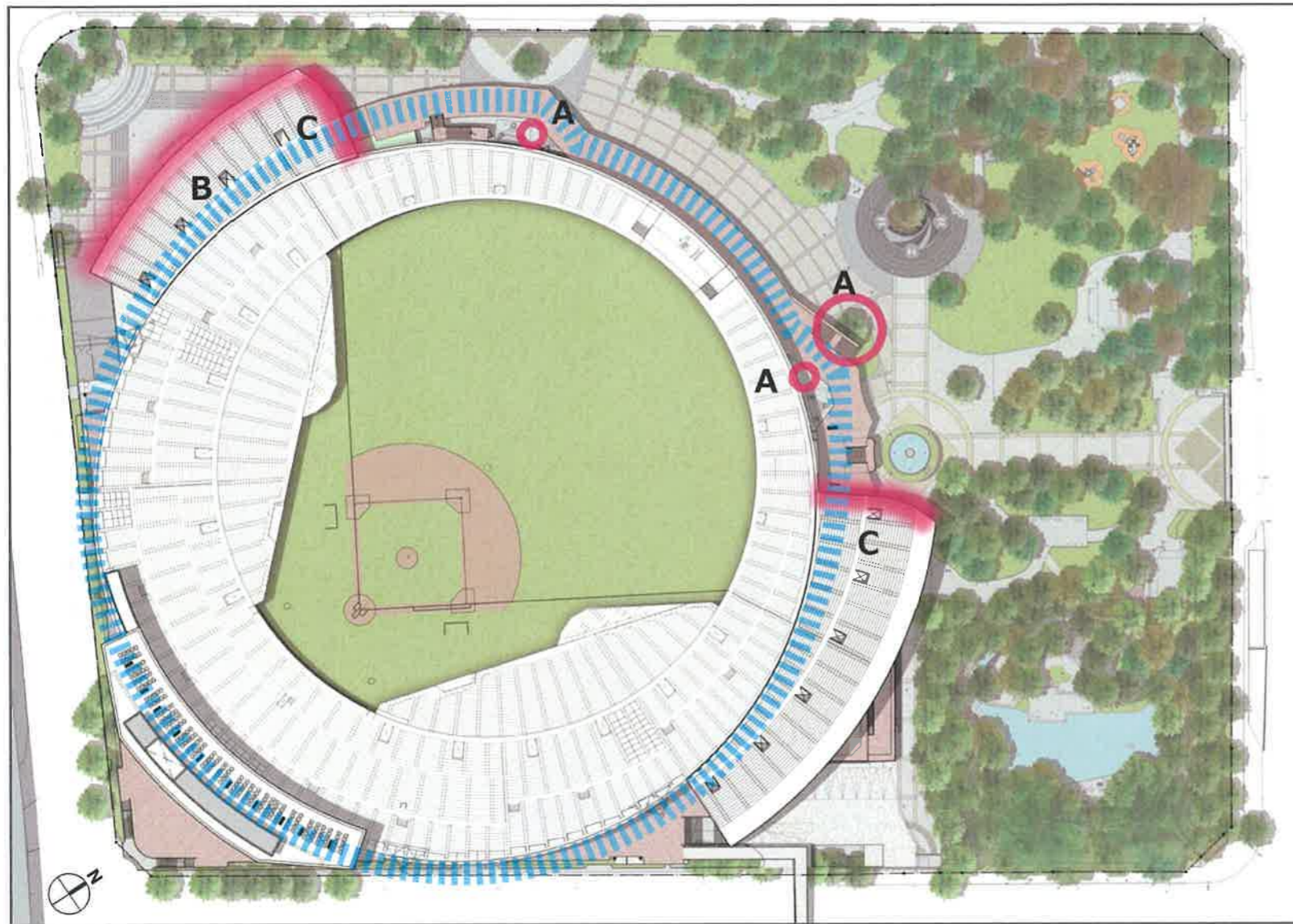
塔屋のヴォリュームを、既存の帯のカラーに合わせて、全面青のアクセントカラーとしている。



公園とスタジアム内が連続しない、塔屋のアクセントカラーを中止とし、港町横浜のシンボルらしく、白を基調とした配色とする。

造園計画の再構築と公園の新たな楽しみ方

■緑化計画の考え方



○ A : 既存樹木の移植・新たな緑化について



増築部に生えている**既存樹木**については、伐採せず公園内・外への**移植・緑化**とする。

公園内の樹木移植場所・新たな緑化については、公園・スタジアム利用者の**動線、人の溜まり**を考慮した上で配置する。

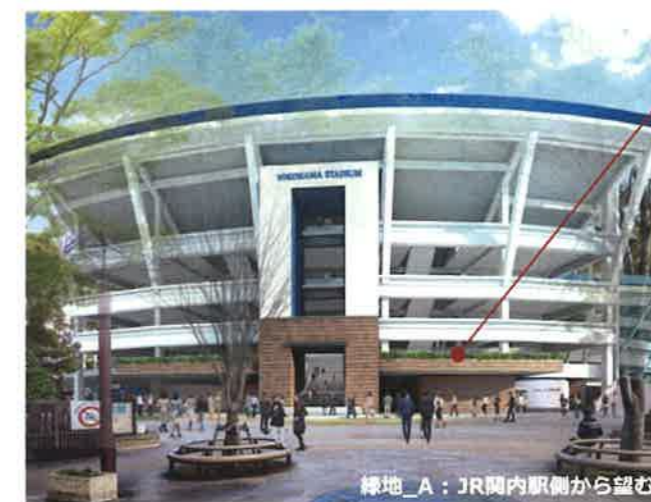
■■■■ 公園の新たな楽しみ方



回遊デッキや高層部への屋上テラス席の設置(公園の立体化)により、公園や横浜市内を**一望できる視点場**を創出し、これまでにない**新たな市民開放**(公園利用)を実現します。

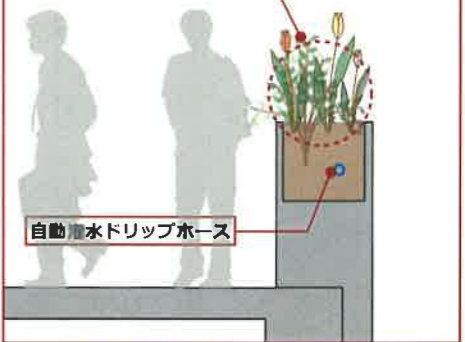
持続可能な立体的緑化空間

B : 四季を彩る植栽と歴史を感じさせるゲートが公園利用者を迎え入れます



手摺部分にプランターを設け植栽を行います

四季を彩る植物
人工軽質土を充填



自動灌水ドリッホース

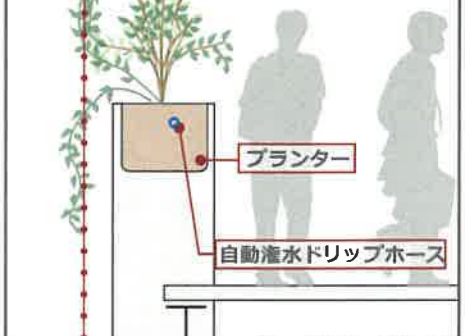
手摺部分緑化 断面イメージ

C : 壁面緑化により公園側・回遊デッキに快適な憩いの場を創出します



植物を立体的に繁茂させます

サッシ
四季で変化する蔓性植物



プランター

自動灌水ドリッホース

壁面緑化 断面イメージ

定期的な維持管理により、良好な緑化空間を提供します。

建物内外へ良好な緑化空間を提供するため、各植生に合わせた維持管理方法を検討します。

①: 植栽域の点検 ②: 灌水設備 ③: 施肥対応 ④: 除草対策 ⑤: 病害虫防除

予定作業内容	年間回数	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
定期巡回		年 12回 実施											
施肥・蒸散抑制剤		定期巡回の際に適宜実施 ※液肥注入ポンプを通じて常時実施、巡回時に適宜原液補充											
発育時期		■											
剪定・枯損苗交換(年6回)		3~4月 1回			6~7 1回			9~10月 1回			11~12月 1回		
病害虫発生時期		■											
防除	通年	年12回の剪定時に合わせ根際とし、部分的洗浄、消毒などを実施します。											
散水	頻度	週あたり4回(月・水・金・日) 20分			週あたり4回(月・水・金・日) 30分			週5日程(月・火・木・土) 30分			週あたり4回(月・水・金・日) 20分		
*標準例		※春~秋の期間は早朝に実施、冬季はAM9時~10時頃に実施。											

抽出される景観特性

関内駅側 …………… 公園の顔として**夜間の賑わいを創出**するような照明計画とします。

公園北側 …………… 歴史ある**夜間景観を阻害**しない、照明箇所を限定した計画とします。

プロ野球試合時 …………… 関内駅側・公園北側の照明コンセプトを踏襲しつつ、イベント時の来場者(多人数)の**安全性・誘導性を確保**するための照明を歩道・各種ゲート・受付に確保します。



1：鳥瞰(全体像)

スタジアムを浮かび上がらせる**重心の低い照明**とし、夜間の**賑わい**形成に寄与します。

2：関内駅側

関内側ゲートのタイル壁・柱を重心の低い照明により、浮かび上がらせ、**街並みに調和**しつつも横浜公園の入口にふさわしい**品位のある**照明計画とします。

3：回遊デッキ

公園北側は人のいる場所に灯りを限定した**落ち着いた**照明計画とし、**防犯性を確保**した上で、日本大通り側の**夜間景観を阻害**しない計画とします。

4：人工台地

壁・柱を重心の低い照明にて浮かび上がらせると共に、**暗がり**が出来にくい照明レイアウトを検討することで、**夜間でも歩く楽しさ**を感じられる計画とします。

4：人工台地



スタジアム 休場時とイベント時の照明計画

1：鳥瞰図

休場時



イベント時



2：関内駅側

休場時



イベント時



3：回遊デッキ

休場時



イベント時



